■□■

あれから1年以上が経ち、3年生に上がった澤村達は、今年度は同じクラスだった。
2年の後半から、密やかに囁かれ始めた噂は、今の3年4組では、すっかり常識の範疇だ。
途中から隠すのも面倒になったのは事実だが、おかげで、同学年からのラブレターは、ほぼ一掃出来た。
密かに澤村を狙っている女子も多い事を、危惧していた菅原にも、丁度いい結果に落ち着いた。
幸せそうな当人達を目にしてしまえば、何もいえなくなってしまう同級生達は、とても寛容だった。
皆が皆、一風変わったバカップルだと思ってくれるのは、意外と心地よく、無条件で祝福されている気分だった。
しかし、たまには今日のように、手紙を預かってくる事もある。
「今度からさ〜、突っ返してくれよ」
いちいち断るのも面倒だと言いたげな澤村に、軽く肩を竦めた菅原は、自分だってそうしたかった。
「もちろん説得したよ、でも、学年違うからとか言って泣かれちゃったらさぁ・・ムリだべ」
下級生を泣かしてまで断るのは、良心が痛むと告げる菅原に、澤村も最初の手紙を断りきれなかった負い目がある。
しかし、何だかんだと言いつつも、懐が広い澤村と違い、時折爽やかな顔で毒を吐く菅原は、当然の権利のように言ってみせた。
「でも、ちゃんと、付き合ってる人がいるからムリだと思うよって、伝えといたから大丈夫だよ♪」
あんまりな忠告に、思わず噴出した澤村は、腹を抱えて笑い出した。
「去年までは、好きな人だったのに、ハードル上がったなぁ〜」
ケラケラと爆笑する澤村は、同調するばかりで、今後からその手でいこうと、ほくそ笑んだ。
徐々に静まってきた笑い声に、可愛く微笑んだ菅原は、徐に机を軽く横に避けると、正面から抱きつくような形で澤村の膝の上に座った。
重みで僅かにバランスを崩した澤村は、背後のラックに凭れ掛かかりつつも、宥めるように囁いた。
「どうした？」
「充電中〜」

今では心配になることはなく、見る目がいいと賞賛する反面、それでも、気に食わないわけでもない。
懐くように擦り寄ってくる菅原に、されるがままになっていた澤村は、自然と心音が大きくなっていく。
そして、首筋に懐いたまま小さく吹き出した菅原は、堪えきれないように笑い始めた。
「心臓の音、早っ・・・」
トクトクと鳴り響く心音は、徐々に早鐘のようになっていく。
「仕方ないだろ」
自分では抗えないと言いたげな澤村に、更に喉の奥で小さく笑った菅原は、上目遣いで微笑むと悪戯っぽく聞いてみた。
「ドキドキするだけ？」
「・・すっげぇ、ムラムラしますが」
まるで挑戦的な仕草に、頭の芯まで痺れそうだった澤村は、これ以上煽られると、耐えられる自信もない。
しかし、それを嘲笑うように、再び笑い始めた菅原は、楽しげに声を弾ました。

「まぁ、もう俺の尻に、何か当たってるしな」
「不可抗力です」
最初から確信犯だった菅原は、自分の腰を軽く押し上げることで、布越しに擦り上げる。
急激に与えられた刺激に、咄嗟に菅原の腰を抱きしめた澤村は、若干窘め気味に囁いた。
「ちょっっ、ホントに襲うぞ！」
それすらも楽しげに笑った菅原は、柔らかく微笑むと、澤村の唇に触れるだけのキスをした。
「襲ってよ、充電、充電♪」
「まだ、夕方ですけど・・」
珍しくも大胆に誘ってくる姿に、すでに頬が緩みまくっている澤村は、抱きしめた腕を放す事もなく呟いた。
しかし、更にお強請りするように、可愛く首を傾けた菅原は、上目遣いで見つめてくる。
「ダメ？」
「喜んで♪」
最初から強く断る気もなかった澤村は、腰に回していた腕を、服の間へ手を滑り込ませ始めた。
ズボンのジッパーだけを引き降ろして、すでに立ち上がりかけているものを引き出した菅原は、